

優位雌搬出後の当園インドゾウの飼育経過および搬出雌の近況について

○佐藤英雄，飯野雄治，小川直子，古田洋，藤澤加悦，矢口茜
(よこはま動物園)

横浜市立よこはま動物園では開園以来3頭のインドゾウ (*Elephas maximus indicus*) を飼育してきたが、自園での繁殖は難しいと考え、2016年9月20日、繁殖を目的に3頭の中で優位だった雌を搬出した。自園に残ったペアのその後の飼育経過および搬出した雌の近況を報告する。

開園に向けインド・アッサム州より3頭のゾウ (1.2.0) を1999年3月20日に搬入した。各個体は雄のラスクマル (搬入時推定9才)、雌のチャメリー (推定8才) とシュリー (推定4才) で、この3頭の関係はチャメリーが最も優位で、ついでラスクマル、シュリーの順であった。チャメリーはラスクマルのマウントを受け入れず拒否するが、ラスクマルとシュリーは関係良好でマウントも見られた。3頭のこのような関係が続く中で雌は繁殖適齢期を過ぎてしまうという懸念があり、チャメリーを新たな雄と繁殖させるため、2016年9月20日に横浜市立金沢動物園 (以降、金沢) へ搬出した。シュリーは年上のチャメリーがいなくなることで精神的ダメージが心配されたが、むしろ落ち着きが出た。ラスクマルとシュリーは良好な関係からズーラシアでの繁殖も期待された。

当園ではゾウのペアリングは発情兆候が生じたときに行っていたが、この方法では観察漏れにより繁殖適期を逃している疑いがあり、2016年10月下旬より午前中は雌雄同居することとし、2016年11月、2017年9月、2018年1月、2018年8月に連続したマウントが観察された。しかし、陰茎の挿入はできずに終了した。ラスクマルとシュリーの間には昨年8月11日以降、発情行動は認められない。

一方、チャメリーは金沢へ移動後、2017年4月8日、2018年5月23日、24日、2018年9月3日、4日、5日に金沢の雄のボンとマウントがあり、ラスクマル以外の雄は受け入れることが分かった。繁殖にはいたらず、チャメリーの年齢を考え、2019年3月18日、繁殖経験のある雄がいる豊橋総合動植物公園 (以降、豊橋) へ移動した。移動から14日目の4月1日～4月3日には雄のダーナと交尾があり、7月8日～9日にも交尾があった。

今回、ゾウの交尾を見学する機会が得られたことで感じたことは、雄のマウントへ至るアプローチが異なることである。ラスクマルは激しく雌を追い回しマウントするが、ダーナは静かに雌へアプローチしマウントへ至り、交尾経験のある雄とない雄との差を感じた。

チャメリーは豊橋へ移動して半年ほどだが、環境にも慣れ幸せそうに暮らしている。金沢と当園のスタッフは月に一度チャメリーの削蹄を兼ねて様子観察および打ち合わせのため豊橋を訪れているが、この「幸せそう」という感想は訪れたスタッフの共通したものである。蹄の状態も良好で、私たちが少しケアする程度の伸びである。また、日本大学生物資源学科野生動物研究室がチャメリーの行動を追跡調査しているが、常同行動が認められなくなったとの報告を受けた。これらはゾウを飼育するうえで参考とすべきことであり深く考えさせられる。今後、チャメリーは個体間およびスタッフとの関係も良いので妊娠の成功を期待する。

また、シュリーはその年齢を考え、今後の繁殖についてどのようにしていくか方法を考える必要がある。